



戦前戦中のお茶大付近

正井 泰夫

私は、昭和4年、東京府東京市小石川区小日向台町一丁目で生まれた。今の文京区小日向二丁目、お茶大のある文京区大塚の直ぐ南である。現在、お茶大南門向かいの新大塚公園や筑波大付属中高のある辺りには、兵器廠跡の草ぼうぼうの広い空き地があった。子供のころ、有刺鉄線で囲われたその荒地に侵入し、ギンヤンマやトノサマバッタをよく採りにいったものだ。その先にあった女高師の立派な建物は、少し低いところにあったせいか、木の陰でよく見えなかった。立派な正門は市電（昭和18年から都電）通りであった。ここでのちに専任教員をやることなど、全く想像もしていなかった。兵器廠の跡地の一部には、恐ろしく立派な東方文化学院という国策で造られた研究所が建った。

太平洋戦争の少し前に大塚窪町の東京高等師範学校の敷地内にあった高師付属中が、この兵器廠跡に移転してきた。昭和17年春、その付属中に入學したが、跡見女学校の角から音羽に向って新たに道がつけられ、高師付属中の入口ができていた。音羽側の斜面は椎などのうっそうとした樹林だった。広い運動場は関東ロームの赤土で、ものすごい砂嵐になったことがあった。この下り道の先は音羽の街の前で急に狭くなり、自動車は通り抜けられなかった。この道の右側が女高師で、西隣にはまだ兵器廠跡の荒地が残っており、土手に登ると女高師の立派な建物が見えた。戦争が激しくなってきた、中学生の私たちは、動員で女高師正門前の細い道の右沿いの建物を、2～300メートルにわたって取り壊した。防火帯づくりである。

戦争末期の昭和20年5月25日の風の強い深夜、B29爆撃機による最後の東京大空襲があった。小日向台の南下を流れる江戸川（神田川）沿いにつくられた幅約100メートルの防火帯（川と都電通りを含む）を簡単に飛び越えて、巨大な火の手と赤黒い煙が江戸川橋方面から押し寄せてきた。消火作業をやめて、徒歩10分の付属中まで、家族や隣人と火の粉の舞う道を逃げた。しかし、しばらくすると目の前で木造校舎に火がつき、その先の護国寺へと逃げた。そこは避難民でいっぱいだったが、秩序だっていて、騒ぎは全く見られなかった。

翌朝、護国寺の前の音羽通りを見ると、建物も焼けておらず、講談社の立派なビルが見えた。音羽通りの北半分は焼けなかったのだ。私の学校と家へ戻ってみた。台地の上の学校は完全に焼け落ちていた。焼夷弾が一発も落ちなかったのに、小日向台町は全滅だった。焼け残ったのは、少数の鉄筋コンクリートや煉瓦の建物だけだった。宿直の教職員などの努力もあって、幸い、緑と不燃建築の多かった女高師とその付属学校は被害が少なかった。こうして現在、正門や本館、幼稚園などが、昭和初期の建築文化財として保存対象に指定されている。

昭和は遠くなったと思う今日この頃である。

まさい・やすお
元本学教授
立正大学名誉教授